

# 耕して天に至る

その一

この風景を見て

何を思いますか？



昭和30年代まで愛媛県南予地方・宇和島一帯には、段々畑の風景が見られた。  
——段々畑を作り置き、石垣を築いて造成された果樹畑の横は、「耕して天に至る」と形容され、奥山から山頂まで続く風景は、ワラス式海苔の複雑な地形と調和しながら、美しく、また美しい光景を演出してきた。  
しかし、かつての段々畑は、あとかたもなく、今は、原生林に覆われているだけである。

これはたんなる郷愁の風景か

それとも、

現代に問いかけるものがあるのでしょうか？

# 耕して天に至る その二

何百年、恵みを与えてくれた段々畑は、そこにあったことさえ想像できないほど、

## 段々畑の歴史

江戸時代初期、農民の食糧自給のために畑作地が開墾されたのは事実だ。明治開港にかけての農業の発展が人口増加をまねき、食糧を確保するために段々畑がつくられた。太平洋戦争後、食糧の著しい不足のため、農村の二男・三男や海外移住者などの手によって、再び開墾が推進された。しかし、高度経済成長期、糧を求め地元の若者達が多くの若人が流出し、採掘者が不足した。そして、段々畑は段々その姿を消した。

## — 段々畑が「命」を「ついで」に与えていた —

美しく楽しい生活だが、家業は酷く勤められていた

明治半が終わり、土で育った人々の間には、汗と笑顔があふいていた。みんなで協力し、楽しい労働をした家業の間には、誇りが溢れていた。



労働の辛さ・働くことの価値を誇りながら

今でも変わらない田舎以上の段々畑を、力を振り絞って思い入れを運び上げ、収穫した芋や麦を担ぎ下りた時には、「何となく」が、それは労働が労働の息づきを物語る。

雑木の森の中で静かに眠っている。

美しい風景とともに、家族、親子の姿が消えていく——  
経済性・利便性を追いかけてつくりあげた現代の日本、  
失ったものがあるのでは——？



親子の姿

子供も大切な労働力。家の手伝いはあたりまえと眠っていた。家業みんなで体力の限界いっぱいまで働いた。農作業の中で、子供達は芋とイワシの食卓でたくましく育った。そこには、親子の間での不協和はなかったと言われている。

現代の段々畑

夏は涼しく秋は平水用様に残る段々畑も次第に寂れてきた。三浦半島の北端近くにあるそれにとり替えて、段々畑らしいものはほとんど見られなくなった。かつては山一面耕されていた畑が、今はもう木々に覆われ雑草のすき間から石垣のなごりがみえただけである。



静かめで、(段々畑、段々畑の歴史) ! ! ! !

水さえも簡単に民間の井戸へくみに行っていた時代に比べ、今はお金さえあれば何でも手に入るし、コンビニだって24時間開いている。1坪の水と土にまでではとても満足しないだろう。

段々畑に働く父親の姿を見て、子供達は働くことへの敬愛も持っていた。親が働く、ご飯が食べられることを当たり前と感ずてしまっている私達にとって、働くということはどれほどの尊厳があるのだろうか。段々畑にたくましく育った家業の関係は今もなく、家業内協力や家業の間で起こる収入などが報酬に到達される世の中、何が足りないのだろうか？ 誰か認めた段々畑が物語る。

●「おもしろい写真は、写真家、段々畑の歴史さんからお借りした画像を加工したものです。」

# 耕して天に至る その三

## かろうじて残る棚田

### 棚田は保全されている

日本人には欠かせない「米」を作るという部分が、棚田保全の理由なのではないか。その点、段々畑は存在意味がなく捨てられている。

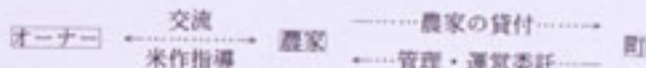
棚田-階段状の水田・・・米  
段々畑-階段状の畑・・・芋、麦



棚田保全の仕組みが生まれている

### 農業（米作）への支援としてのオーナー制度

高齢化と米の増産の必要性により、作手がいなくなり、耕作放棄田に陥られるようになってしまった地域では、経済的打撃として見た場合、棚田に依存する農家は、とても成り立たない。しかし、先達が残してくれた棚田、この地域文化のよきところを、私達の代で残ってしまおうと決意する人達も出てきた。この状況を改善するため、都市に暮らす人々の呼びかけで、棚田のオーナーになってもらい、経済的な負担を減らしてもらおうと共に山村に対する理解や興味を深めてもらうよう活動したが、オーナー制度である。



米作はかろうじて生活の基盤にならなから、棚田は残っている。その点、段々畑の作物（芋や麦）は、現代の生活に結びつきにくい。

「忘れられ、見捨てられている  
段々畑を、再び作るためには  
何が必要か。  
価値はないのか？」



### 環境問題としての棚田を残す動き ビオトープ

保全型ビオトープ・・・水も残っている自然を残す。

保全型または  
創造型ビオトープ・・・水も残った場所に自然を復活させる。

農村部を中心とした野生動物が暮らしやすい環境を、野生動物の生息場所（ビオトープ）の確保が必要とされている。ドイツでは、日本でも認識されるようになってきた。

環境面では、中絶的な文化センターと棚田のオーナーがつながり、そのつながりから自然とつながりも深められ始めている。

このように棚田保全の活動は、  
しだいに活発になってきている。

しかし、段々畑にそのような活動は見られない。

段々畑を再生させる仕組みをつくらう！



農業集落中心、棚田をできることの必要性を広く認知し呼びかけるために、平成21年7月26日に『日本の棚田百選』として全国134地域（177市町村）を選定した。

重要棚田中心、  
重要百選（54地域）  
重要棚田（63地域）  
重要内閣府（10地域）  
が選定された。

この中でこの地域にも、棚田集落と関係して、棚田でとれた米で食糧をまわっているところがある。

# ～国土景観再生事業～

## 耕して天に至る その四

目的：日本の美しい国土の再生、段々畑の景観をとりもどす  
事業参加者：小中高生のいる家族

### 制度—国土景観再生事業

**法** → 『国土景観再生事業』として法律化、農林庁による指導がない、人間の中間的労働による国土景観再生事業の立案・実施。

**対象地** → 『国土景観再生事業』の1つとして、段々畑再生のブロン（再生する地域・地区・農園など）を指定。

**生 産** → 国土景観再生事業の活動のなかから以下の内容をカリキュラム上の組み込む。

- 〔小学生〕
  - ・農具の構造、使用方法を学ぶ、作物の育て方と成長の様子などを観察する。
- 〔中学生〕
  - ・農具の構造と用途からその歴史を学ぶ。
- 〔高校生〕
  - ・『国土景観再生事業』への参加を特別活動とする。

**立 場** → 自治体内で農地を保護し、農地や国土景観再生事業などで農作しやすい環境を整える。

### 事業実施について

農（てん）が実用し、自治体の職員さん、ボランティアの指導、実施。

参加者の数、年齢や性別は？

- 〔年 齢〕
  - ・再生事業に参加している農園は自治体による。
- 〔性 別〕
  - ・男女別のように『国土景観再生事業』も、性別が関係なし、参加者も関係なし。

参加者の事業の期間？

1年～2年間  
（家族が、段々畑一本を自分・自分家族で栽培）

再生された段々畑、国土再生事業参加者による  
収穫された作物（再生事業に参加した農園に販売）



失ってしまったのは、  
このような家族の姿ではないだろうか？

### 事業内容

**目的** →  
〔一 期〕

- ・農具の修理や壊れた農具の交換

〔二 期〕

- ・農具の修理や壊れた農具の交換

**農具** →  
〔一 期〕

- ・農具の修理
- ・農具の修理や壊れた農具の交換

〔二 期〕

- ・農具の修理
- ・この作業を収穫まで行う

〔三 期〕

- ・収穫
- ・収穫後、一部の内訳

### その他

- ・植物に害虫や病気（農具）を発生して対応する。
- ・農具の修理や壊れた農具の交換。
- ・自治体から支給された材料を使い、家族で作業する。
- ・収穫や販売については自治体や農園が担当。
- ・フェリス、日本農具株式会社は関係なし。
- ・事業実施する自治体や地域自治体のホームページも行う。

国土景観再生事業の目的は、人々の暮らしから取り出された汗と労力の結晶である美しい風景を再生することである。また、それと共に、段々畑を農民と人間の手だけで再生することを通じて自然とのかかわりを取り、家族で助け合うことや働くことの偉さを体験することも重要な意味を持つ。

段々畑で働き、助け合い、物を作るという営みに共にした家族の表情は、農具の修理や壊れた農具の交換を通じて自然とのかかわりを取り、家族で助け合うことや働くことの偉さを体験することも重要な意味を持つ。

また、国土景観再生事業は「段々畑」の再生からスタートするが、随分、「おぼろの森」「おぼろの川」「おぼろの山」の景観再生事業へと進んでいる。